

ば

戸田峯仙

末せ世のわれ等をすくふ法の聲いゝど貴く我が胸を

つく

花鳥涙草

不輕品の「我深敬汝」のみこばを大地にびたり耳あ

てゝきく

同

自然の瞳

秋くれば野山の神は菊園に月はきらめく露に宿ら

ぬ

田川恵良

たをやめの黒かみときて瀧の端の白き肌へに白玉の

散る

江原白線

そよ風に散るもみぢ葉はいとしくも我をしたいて訪

づれにけり

下田雨女

白糸の瀧端に立てる乙女子の姿尊し羽衣の

橋

太田赤童

風なげる秋の夕べを音もなく庭もせに散る會式櫻

は

同

天の川さやけくはれて七面の峯に星ふる逝く秋のそ

ら

同

冬の日に山の庵ののきの端に小さき蜘蛛の住家つく

りぬ

同

山寺

東溟

鐘聲迥出最高層青壁無梯不可登

千壑萬峯生暝色一樓有箇看雲僧

同

梵宮高出白雲層露欲爲霜月氣凝

一点燈光透疎木上方應有坐禪僧

同

隔崦清鐘一杵傳禪扉半掩夕陽天

石泉白咽僧無語雲冷山茶花落前

同

木魚石磬上方聞

尋到禪關樹竹分

端的入房先問道

老僧笑指一峯雲

送僧

楚水吳山不計程

無心端的是平生

問君錫杖歸何日

笑指行雲一片輕

行脚僧

偶爾隨緣出翠微

一瓶一錫一麻衣

白雲猶是時歸岫

三界無家何處歸